

別府を訪れた文化人たち

(明治期から昭和二〇年にかけて)

大塚 俊 英

別府を見つめる糧として

はじめに

明治から昭和へかけて、別府を訪れた作家は、残された資料や作品から数十人に及んでいるが、彼等は別府に何を求め、どんな目的で、何を見てそれを自分の作品に描いていたのか。明治から大正、昭和へとその時代とともに変貌した別府の姿をそのときどきで、訪れた作家たちはその目で鋭く見詰め紹介している。

また、彼等が、別府を訪れたときは、自分の作家人生からみれば、どのような背景をもった頃なのか。などど気になるところである。それらの人物を抽出しながら、観光面に私見を加え別府を考えて見たい。

一、明治期の別府と訪れた作家

明治期以前の別府は、温泉のある村として、豊後の湯

治場の存在であった。が、明治期の別府は温泉とあわせて、高崎山と別府湾、鶴見山、扇山に連なる山がとりざたされるようになった。周辺の自然環境の中に存在する別府の景観を作家たちは目をつけ、その存在価値を評価している。その作品から内容の一部を紹介したい。

景観に魅せられた田山花袋

(一八七一〜一九三〇・明治四〇〜昭和五)

花袋は、あるがままの現実を赤裸々に描写しようとした自然主義文学者として、藤村と共に明治文壇の先駆者。作品に「蒲団」「田舎教師」などがある。

彼は、明治四一年に余暇をみて「豊後の旅をおもいたった。彼は旅を愛した。別府を訪れたのは三七歳の夏。別府の景観に魅かれ、極めて印象的な美しい場面を次のよ

うにとらえている。

『大きな峠を越して、ずっと別府湾を見渡したところは、九州地方でも沢山にないようなすぐれた眺望を持っている。夏の海は、思い切って青く、西に連なった山々も規模が大きく、海を隔てて四極山（高崎山）の面白い形も一目でそれを見渡せた。（中略）別府湾は、すぐれた海だ。佐賀関の半島のずっと長く海中に伸びている形など、ことに面白いと思う。それに海の色がいかにも青い。くつきりと紺碧の色をたたえた上に、白い帆やペンキの青い赤い汽船を見たさまは、どうしてもマネーの画にでもありそうだ。それに湾の西方を擁した山嶺の嵐気に富んでいるということもこの湾を彩る大きな原因にもなっている、と思った。黒い屋根がわらや白い壁が晴波に映る日
出の町、海に接する豊岡、古市をすぎて、亀川温泉に出る。ここの立場で、出会ったすさまじい夕立やここを出て仰いだ山峽にかかる虹は、きわめて印象的な美しいシーンであった…。』

また、花袋は別府の町並みにも次のように触れている。『別府の町はにぎやかで色彩もこまやかだが、外見は雑

然としている』とある。さらに別府港は『……忘れられない光景の一つである。夏の夜は賑やかで、人がそろそろと通る。海が黒く光って見えている。運漕店や汽船問屋の前には、荷物を運んだりする車が行ったり来たりしている。白い女の顔がそこらをぶらぶら歩いていたりする。やがてギイギイと櫓を押す音がする。舢（はしけ）は近寄ってきた。』と記している。

勿論、現在の別府観光港ではない。流川通りが海に入った場所の旧別府港である。明治期には、まだ栈橋がなく、沖に停泊する汽船から舢が客を送り迎えしていた。ちなみに、築港は明治四年。船が横付けになる栈橋が出来たのは大正九年である。彼は築港後の別府港も『山水小記』『温泉周遊』などで紹介している。

彼は別府港付近の雑踏の中を『人がそろそろと通る…』とか、『白い女の顔がそこらをぶらぶら歩いていたりする』と、いかにも温泉地らしいやすらぎの世界をとらえ、見逃さずに描写している。

昭和二年、五六歳の花袋は再び別府を訪れている。このときは観光地紹介的な、多分に意図的な取材らしく、

画家の小杉未醒みせびと共に、別府から耶馬溪、中津、森、湯布院を経て再び別府に入っている。そのときの紀行文は『耶馬溪紀行』に残されているが、彼が明治四三年に、最初に訪れた別府の姿が、大きく様変わりしていたことに警告めいた一文がある。

『……二十年とたっていない昭和二年には、全く繁華街となり、温泉祭も賑やかに行われていて、かつての漁村にして、かつ温泉場らしい気分を十分に味わうことが出来なかった。繁華はひっきよう俗化してきました、新開地らしい空気を持つようになった。勿論、都会化すること結構だが、半可通な新開地特有のあわただしさでは困る。(中略)ともあれ別府は湯の量も多く、質も異なり、付近には訪れるに足る、名所旧跡にも富んでいて絶好の避暑地、避寒地とおもわれるが、これが日本、世界の泉都となるためには、背後の山に着目し、ここからの別府灣を大観すべく、また湯布院、久住、飯田高原に避暑地を開発するとともに……』などと別府の雄大な自然環境に着目し、七、八十年後の今日の別府の方向性に新しい期待を寄せているあたりは、さすがなものであり、特筆

すべきであろう。また、『半可通な新開地特有なあわただしさでは困る』という、中途半端な改変を好まなかった。彼は別府訪問の三年後、他界した。

始めて別大電車に乗った森鷗外

(一八六二〜一九二二・文久二〜大正十一)

鷗外は明治三年六月一日から七日まで大分県を訪れた。鷗外はこのとき小倉第一二師団軍医部長に補せられており、徴兵の状況を視察するため、始めて豊州鉄道にのって大分県に向かった。四日市で下車ののち、宇佐、赤松、日出(一泊)別府、大分(二泊)、湯の平、中村、平川(一泊)大太郎嶺、日田(二泊)耶馬溪とまわり、七日に中津から汽車で小倉に帰った。

彼の『小倉日記』によると、日出から人力車を雇い、別府灣を左手に眺めながら、豊岡、亀川、別府を経て電車で大分に向かった。

『二日。好晴昨の如し。朝、日出を発し、山を右にし、海を左にして行く。山は殆ど皆火山の形を存す。是、鶴見、由布の眷族なればなるべし。』

山と海あひだに黄なる麦の秋

別府より電機鉄道に由る。車制鉄道馬車の如くにして、機関を鋪板の下に設く。天井に電燈球三あり。側面に護謨びきの布幔を懸ぐ。三二も坐せしむべし。予の電機鉄道に上るは、是を初めとす。……』

鷗外もまた別府周辺の自然景觀に目を注いでいる。さらに、始めて電車に乗ったらしく、車内の構造を細かく描写している。鷗外はこのとき三八歳。軍医部長の傍ら、嗽石と共に近代日本文学の最高峰を占める作家としての諸作（雁、阿部一族、山椒太夫、高瀬船）はこの後に出版されることになる。

共同温泉場の細かい描写をした徳田秋声

（一八七一—一九四三・明治四〇—昭和一八）

自然主義作家として、平凡な人生からの素材を徹底したりアリズムの手法で描き、後年の私小説の基礎を築いた秋声は、明治三五年一二月三〇日に東京から関西、翌年二月に、大阪から船で別府を訪れた。三二歳のときであった。滞在は約一か月の保養生活であつたらしい。

この別府滞在生活の模様を、後に『光を追うて』『西の旅』『浴泉記』など四十年後の昭和十三年から、自伝的小説として執筆している。彼の苦汁、放浪時代のことを経た後の作品である。作品には、彼が滞在中に訪れた田の湯、竹瓦、楠湯、不老泉、観海寺、鉄輪、明礬、海地獄、坊主地獄さらに朝見病院など、細かく紹介している。

例えば『田の湯温泉』などの風景は、次のようである。『その頃は、田圃の中に、菰（こも）がけか、竹簾（よしず）がこいであった田の湯とか竹瓦の湯とかいふものも、すっかり町の真ん中に繰り込まれていた。湯は驚くべきほど豊富で、素人屋の庭の垣根のなかにも、野天の浴槽があり、浜地に一鍬おろすと、下から温かい湯が滲み出し、散歩する野の道傍や田畑の畦の叢の中からも、ぶすぶすけむりが立っており、人気もない思わぬ処に碧い湯を湛えた浴槽があつたりした……』

当時、別府から「別府温泉の印象」を求めたアンケートの返事が、図書館の資料室にある。葉書に、秋声の自筆で『明治三一年頃の二月ころと思います。階上に浴場が出来て、その祝祭のあつたころを覚えています。田の

湯とか、竹瓦の湯とかよしげや菴圃いの湯も多かったようです。何よりも湯の豊富なのに驚きました。観海寺(?)川より、鉄輪・明礬の湯、それから海地獄など巡り、他に数のない温泉地帯だと思いましたが、設備が未だ出来ていなかったのが、かえって良かったのでしよう。今はだいが俗悪だという話ですが、それだと再び行ってみて、失望するかもしれませんが、行ってみたいから何ともいえません』と書いている。

秋声も、花袋と同様に、別府の自然景観や温泉湯治場ふうの温泉情緒に目をつけ、そこに価値を見出だしているようである。目先だけで、中途半端な都市化現象を求める別府の変貌は望んでいないようである。このことは、別府温泉のあり方への警告と受け取れる一文であろう。

新聞連載で、別府を全国紹介した菊池幽芳

明治二四年、大阪毎日新聞社に入社し、三十数年にわたる記者生活のかたわら、新聞小説を執筆していた菊池幽芳は、明治四〇年一〇月に始めて別府を訪れている。このとき、彼は約半月を流川の日名子旅館に滞在し、『別

府温泉繁昌記』を大阪毎日新聞に連載し、明治四二年にこれを刊行している。幽芳が描写した、当時の別府の印象を二、三紹介すると、別府港では『……船が小さな築港の中に入ると、周囲をめぐる突堤の下の砂からはしきりに湯気を立てているのが、丁度冬の川面に朝霧が立っただよに見ゆる。また港に注ぐ「流川」は温泉の川で、これがまた盛んに湯気を立て、海に流れこんでいる』とあり、これは棧橋の出来る以前の別府港風景である。

『砂からはしきりに湯気を立て……』とか、『……冬の川面に朝霧が立つように見ゆる』などいかにも幻想的なシーンに目を止めて描いていて鋭い。この幻想的なシーンは浴場の描写にも見られる。

『……浜脇の方へ行く途中に、寿温泉という往来の角に小さな新しい温泉があったが、往来に面した入り口が開放になっっているので、女湯は丸出した。(…中略…)往来はまだ、日盛りで、西日を受けた温泉の中は、隅から隅まで見え透く。それに女達は平気で入っている。僕らが四、五十分過ぎてからここを通ったときにも、この通りの入り口が開放して、やはり前と同じ女の顔が薄く籠っ

た湯気の中に、画絹の裸美人をみるようであった』

菊池幽芳は、別府を訪れた文人の中でも特筆すべき人物である。特に『別府繁昌記』は全国に温泉地別府の存在を高め、後年、明治期の別府の姿を知るのに、大変貴重な資料となっている。なお、大正二年に執筆した小説『百合子』は、大阪毎日新聞に連載し、舞台を別府にとり、結婚問題、家庭問題を題材としている。主人公百合子は、肺結核患者として、その治療に別府を保養地として、朝見病院や鉄輪の地獄付近の紹介がなされている。

二、大正期に訪れた作家

大正期の別府は、温泉の湧き出るひなびた湯治場、保養地の性格から、一方では、都市化を目指し、近代化へ脱皮しようとし、昭和の『観光地』へ繋ぐ過渡的な時期でもある。

明治期に訪れた文人、作家たちは、別府を「豊富な湯の出る保養地」として眺め、自らも別府の地に保養を目的として、滞在した。その中で、彼等は自分を見つめ直そうと試みたようである。雄大な海と山に囲まれた

地形、温泉に接することで、自分のこれまでの作家活動を振り返る転機となり得た土地であったろう。

大正期に入ってもこの現象は残り、作家たちは別府を自らの精神を癒す保養地として、訪れている。が、大正期の時代が別府に何を求め始めたのか、別府は温泉保養地の性格から観光、歓楽の地として、町全体が動き始めたことである。

観光地を目指した別府は、意図的に客を集めようとした時期でもあり、十三年に、町制から市制が施行されると、この勢いは強くなった。十三年にポールクロードル駐日フランス大使が訪れ『別府に再び訪れん、温かき温泉と温かきもてなしに、わが生命よみがえる……』という『別府を讚う詩』を残した。さらに十五年には市は『漫画まつり』を主催し、漫画家の池部均を始め、十五人の当時流行の漫画家が招待を受け、別府温泉の湯治場風景を漫画でスケッチし、絵葉書宣伝をし、朝日、毎日の新聞に掲載している。これらから文人、作家たちの訪れはさらに多く、別府は取材対象地として、全国に広まり始めた。同時に、油屋熊八の登場により、企画された

事業で文人が招待され、別府観光の基礎を築いたと言われている。

別府が、都市化し、近代化を求めようとすれば、以前の温泉湯治場が薄れ、ちぐはぐな姿が露呈してくる。これらの姿は、田山花袋や徳田秋声はそれを批判し、斎藤茂吉、木下利玄らの歌人も喧騒な別府を好まなかった。

が、その新開地の、ちぐはぐな巷の町の生活に生きる人情、哀感の実像に目をつけた作家たちもいた。何となく虚像の蠢く中に、人間の真実の姿を見付けようとして別府を取材地として求めた作家が現れる。何となく秘密を抱えていそうな人達を探りに、作家たちの取材があったらしい。自らが虚と実の狭間に生きる作家たちにしてみれば、別府は興味の地になったに違いない。別府は表で、すっきりした都会化現象を走りだったが、片隅の、ごみごみした街角には、人情の舞台が、あちこちに展開され始めていたであろう。そこに作家たちの目が迫っていたのかもしれない。竹下夢二が姿を見せ、昭和期に入ると織田作之助が訪れる。

このため、大正期に入ると、別府を訪れる文化人、作

家たちは、保養を目的とする人と、別府に虚実の姿を描く格好の地として求める人の二つが現れることになる。

新聞小説の舞台に取り上げた田口掬汀

田口掬汀は菊池幽芳らとともに、明治から大正期にかけて大衆文学作家として活躍し、題材は主として結婚問題をとり上げ、いわゆる家庭小説という作品が多かった。

大正二年、別府を訪れた掬汀は二年後の四年から五年にかけて、大阪朝日新聞に『ふたおもて』という連載小説を発表した。小説の舞台は、大阪と別府で、主人公の鞆江と和歌子の結婚問題、家庭問題などのからみの中に、流川通二丁目にあった「若松屋」（現別府中央公民館横に移転されている）他、鉄輪、明礬の地獄地帯の見物をはじめ当時の別府の様子がリアルな描写で紹介されている。例えば旧棧橋から中浜筋では

『……緑の山を背景にしたこの町は、ゆったりとしている。ハシケの着く港の中には、湯治客の苦（とま）舟ばたをすり合わせてもやっている。引き潮の砂から湯気が立ち上がり、町の中を湯川が流れ、至る所に湯の香がに

おう。……中浜筋を通過して西洋風の劇場や活動写真館など入場者を悦ばす設備が行き届いていた。都の縁日でも見るように種々の露店のひしひしと立ち並ぶ町を浴衣に羽織を引っ掛けた湯治客が、肩擦り合わせていた。松原の盛り場を見、横に折れて海岸を散歩した……」とある。

心境に活路を求めて長期滞在した徳富盧花

(一八六七—一九三三・明治—昭和二)

「不如帰」「自然と人生」によって文壇に独自の地歩を占めた盧花は明治三三年に発表した自伝的小説『思い出の記』の中に別府を舞台にした場面を取り上げている。が、後年、彼が大分の公会堂で講演した際に『思い出の記』に記した別府は空想で描いた、と話している。実際には別府を訪れたのは、大正二年であった。

小説的旅行記『死の蔭に』によると、彼の旅は、上巻『門出から九州めぐり』中巻『南満州と朝鮮』下巻『裏日本を伝ふて』という具合に、九十日あまりをかけて、旅をしている。別府へは、大正二年九月二日、東京から上諏訪、名古屋を経て、山田、鳥羽、大阪、神戸、明石

を巡って、汽船・木浦丸で別府に入っている。

彼は明治末から大正の初めにかけて、著しく悲哀と憂鬱な日々を送る生活に陥っている。ついには、死の蔭に捕らわれ始める。彼はこれに活路を見出だすべく、旅立ちを思い付き、心を癒すその道筋の一つに別府を選んだ。『別府入りの夕暮れは、ひどい雨だった。船が港に着くと、ハシケが迎えにくる。三台の人力車を走らせる。：中略：深く母衣(ほろ)を下ろした車は、ガラガラ、ガタガタ埠頭の混雑を後に、火影人声賑やかな声を横切るようすであったが、やがて急な勾配の山坂路にかかった。坂はなかなか長い。まだかまだかと母衣の中から透し見つつ、ほっとする頃、やっと別府ホテルの玄関に挽き込まれた……』

まだ舗装の出来ていない田舎道同然の流川通を山の手へ向かっている光景である。「まだかまだか……」という感じだっただろう。別府ホテルは現在の明星学園の敷地にあった。『……ここは鶴見岳の麓、石垣原古戦場あたりで、大石のごろごろする虫の音しげき草原の一部を開いて建てられてある。町から小半里の上りで、不便であ

るだけに居心地がよい。日本間に起居し、食事は食堂に出る。客の九割は外国人である。滞在中、雨と曇りの連続で：略：」この後、盧花はホテルのベランダから見える周囲の景観はナポリのそれに劣らぬと嘆賞し、とくに浜脇から神崎あたりまで見通せる遠景に着目して記述している。現在の、この位置から大分まで、す通して遠望出来るというからには、町の住宅もまばらで、遮る建物もない、当時の別府の風景が想像出来る。私の父が、子供の頃、家の庭の高い木に上って、親が中浜通りを歩いているのを見て手を振り合っていた、という話を聞いたことがある。位置は現在の中央公民館の付近である。

盧花は坊主地獄、鉄輪の地獄地帯をめぐり、別府の浴場で、心の傷を癒した。

「別府温泉で一番興味を覚えたのは、砂湯の光景である。港の南と北の浜にあるが、前者へ出掛け、サルマタひとつで潜り込む。ホテルに滞在のロシアの一青年将校もリュウマチで、毎日砂湯に通っている。湊屋の二階から見るとやはり来ている。この青年とボーイの仲介で応接室で話す：略：」

彼は、「死の蔭」を覚えて旅に出たらしいが、別府の風景、温泉、浴場など彼の別府を見る目は、輝きの後が文章の所々にみられる。またロシアの青年と話をするなど、暗い陰はみることは出来ない。保養地別府の中で、彼の心は幾分なりとも取り戻せたのだろう、と推察される。彼にとっては、保養地別府は生気を取り戻す恰好の地になった。

赤銅御殿と、恋に生きた柳原白蓮

(一八八五—一九六七 明治一八—昭和四二)

赤銅御殿は歌人・白蓮の別荘として、大正七年、筑豊の石炭王伊藤伝右衛門が建てたもので、福岡市天神町にも同じ名の別荘があった。別府の敷地一万一千平方メートルに、けやき、ひのき、桜などふんだんに使った九棟の建物はすべて渡り廊下で繋がれ、屋根瓦の下には長野県諏訪産の鉄平石を薄板状にして敷き詰めた豪華なもの。壁に金粉を吹き付け、随所に銅板を使った贅沢な造りであったことから、赤銅御殿と呼ばれた。流川通十二丁目

の交差点からさらに、山の手へ二、三百メートルくらい

向かうと右手に豪壮な屋敷があった。庭に白蓮の歌碑があった。

『和田津海の沖に火燃ゆる火の国に我あり誰そや思はれ人は』

白蓮は、華族柳原前光の子として生まれ、叔母は大正天皇のご生母でもある。一六歳で政略的な結婚をさせられたが、二一歳で離婚。二七歳のとき、二五歳年長の、九州の炭鉱王伊藤伝右衛門と結婚。美貌の歌人白蓮と無学の伝右衛門とは、初めから愛のない生活だったと言われている。伝右衛門は金の力で、別府に豪邸・赤銅御殿を与えて、住まわせていた。そんな折、白蓮は東大生の宮崎竜介との出会いがあった。

白蓮の書いた戯曲の出版打ち合わせに、編集担当の宮崎が東京から別府に来た。空しく堪え難い日々を送っていた白蓮と宮崎は急接近し、白蓮は始めて知った恋心を燃焼させ、当時としては、反逆に近い女性から夫への離縁状を出した。このことは、さらに華族というもとも困習的環境に対する挑戦のような行為でもあった。その内容は、金力をもって、女性の人格的尊厳を無視する貴

方に永久に訣別を告げます、と彼女は個性の自由の尊重と、飾りものの生活からの脱皮とを宣言した激しい調子のものであった。

当時の新聞はこのことを「大正の恋」「世紀の恋」と囃し、社会的波紋も大きかった。赤銅御殿を出た白蓮と宮崎の生活は、苦しくはあったが充実したものであったという。

赤銅御殿もその住人と同じ様に数希な運命をたどった。戦前・戦中は海軍の将校宿舎「水交社」として、戦後は米軍の将校クラブとして接収された。解除後は、ホテル・赤銅御殿となったが、昭和四四年、高級住宅地造成のため解体された。建物の保存を望む声もあり、惜しまれながらの取り壊しとなった。御殿の欄間、鬼瓦、歌碑などは市に寄贈されている。現在、敷地跡に歌碑がある。なお、大正七年のこの時期、別府の日名子旅館に滞在していた竹久夢二が展覧会を催した折、白蓮が資金の援助をした、とも言われている。また赤銅御殿を見学に行こう、と白蓮に電話して尋ねた作家たちもいたという。

春菊売る娘の売り声に和む齋藤茂吉

(一八八二—一九五三 明治一五—昭和二八)

歌人・茂吉は大正七年から十年まで長崎医専教授をしていたので、その期間に別府を訪れた。歌集『つゆじも』に次のような詞書がある。

『三月一八日。午後一時、小倉発、午後四時四一分別府着。(1)別府には大正八年夏、ひとたび来たりき。街見物。(2)保養院長鳥潟博士訪問、博士は大学の同窓なり。大分共進会を見る』

『あたたかき海辺の街は春菊を既に売りあるく霞は遠し』
『鳥の音も海にしば鳴く港町湯いづる町を二たび過ぎつ』
茂吉は大正八年に来別したが、このときの歌は、残っていない。茂吉は手帳に歌やらその他種々のことを書きとっていた。それが大変な量になり、全集に収められている。大正八年当時のものは後に火災にあい焼失している。

全集二七巻に、別府の町を散歩した様子が、手記の中に見られる。

『別府ノ町ヲ散歩、可愛ラシイ娘ガ「新菊ア ヨイカイ

新菊ア ヨイカイ」と振れて歩く。長崎の「トノラゴ

買ヘマッシーンカイ」。「クリクワエノクワト」ト差別アリテオモシロシ。別府ハ何となく湯町のしづけさ無く、共進会にて粗野の風漲ギレルニコノ売人の振り声ヲキキハジメテ心和ムを感ズ」(原文のまま)

茂吉もまた別府の静けさの無い町の姿を指摘している。温泉保養地から歓楽地へ変貌の過程に向かっていたのを鋭く見詰めている。が、春菊売りの娘の売り声にやすらぎを感じている。自分の、魅せられる別府の姿を瞬時に捕らえているのは、さすがといえる。彼もまたしつとりとした別府を欲していたのだろう。茂吉はこのあとは、別府を訪れていない。

一年間の滞在をした木下利玄

(一八八六—一九一五 明治一九—大正一四)

武者小路実篤、志賀直哉らと共に『白樺』を創刊。短歌の他に小説なども発表した利玄は、その後、短歌に専任し、『白樺』の理想主義に立つ新しい短歌実践に励んだ。その彼が大正五年の大晦日に別府を訪れた。三二

歳である。そして翌年十二月一七日に別府を去るまで一年間の滞在をしている。彼は別府に滞在の間、はじめは朝見川のはとりの魚町に生活し、後に弥生町に居を移している。別府の生活は日記に細かい描写で残されている。

『三月三日。土曜、曇。今暁、三時目さました時、下の川（朝見川）に舟よそのの音と人声きこえしが四時半にめざむれば、沖べに人声がよどんでいる。もし夜漁かと起きて見ると磯近き沖合いを今夜は、くもりたることとて、暗い沖のただ中に漁火が四十点程、煌々とてり、声はそこからくる。磯にはひそかに浪がよっている。しばらく見ていて人間のすることがいとしくなった。寒くなつて床についたが、もうよくねつかれなかった。朝海岸を歩いて昨夜沖にいた人々が鯛を分っているのを見た。魚が青白くひかっていた。今日も対机。『文章世界』の歌を作ったが、まだ正しい所に入りきらぬ。夕方雨』

大正八年の木下利玄歌集『紅玉』の中に、別府を素材にした歌がある。

『朝の潮ゆたかにみり築岸に上揺れ波の上り下りすも』
『築岸の下すく深き朝の潮揺れ寄るごとく石間鳴らすも』

現在、国道十号線からは、すっかり埋め立てられ、住宅地になっているが、当時は魚町から海辺へはすぐ裏といた位置にまで波が打ち寄せていたのだろう。彼は土地の漁師たちが網を引いている姿をみて「人間のするごとがいとおしくなった」とあるが、別府の人たちのひたむきに生活する様子をじっと見詰めている利玄の目は、やはり茂吉の、春菊を売り歩く娘の声に魅せられた心境と同じものだろう。両人とも喧騒な別府でなく、しっかりとした土地の生活や人情の姿を鋭く拾っている。

愛人彦乃の看病に尽くす竹久夢二

（一八八四—一九三四・明治一七—昭和九）

叙情的な美人挿絵画家として、明治・大正の挿絵界を風靡した夢二は、好んで、可憐で、艶のある細おもての美人を描いた。それは当時の世相を代弁する姿でもあった。そして彼の描いてきた美人は夢二の愛人笠井彦乃の面影であったといわれている。

岡山県出身の彼は一六歳で上京し、早稲田大学中退の後、挿絵画家となる。さらに夢二の書いた絵葉書を売る

店・港屋の主人・たまきと結婚。夢二の絵のモデルはたまきだったが、港屋にしばしば来ていた画学生の笠井彦乃へ移り、彦乃は夢二の恋人になる。

大正七年、彼は、自分の絵の新天地を求めて、長崎へ旅立ちを思い立つ。これより以前、彦乃との恋に落ちていた夢二は、彦乃とひそかに京都に滞在し、忘れられぬ日々を送っていた。夢二の、長崎への旅立ちに、彦乃も同行を希がったが、すでに肺結核の病を患っていたため、夢二は思い止どまることを説き聞かした。が、その際、別府で、保養を目的として、落ち合うことを約束する。

夢二の長崎への旅立ちの後、彦乃は七月、別府の日名子旅館に投宿したが、間もなく病が急に進行し、病床に伏すことになった。知らせを聞き、夢二は長崎から別府へ入り、看病のために滞在する。この辺りのこと、昭和三三年、大分合同新聞に『別府における夢二』と題して、息子の虹之助が紹介している。

『大正七年頃だった。父は体の弱い彦乃さんを連れて、暫く別府の日名子旅館に滞在した。すでに相当進行していた胸の病に、二、三日やそこいらの湯治では、到底元

気になれそうにないので、父は、ともかく彼女を宿に預け、長崎の永見徳太郎さんを訪ねて出発した。そこで父は後世に残る傑作をかいた。長崎の滞在中も別府に残した彦乃さんが気がかりで、そうそうに引上げて彦乃さんの待っている日名子旅館に帰ってきた。そこで旅館の主人の世話で、画会を開いた記憶があるが、別府を訪ねる機会もなくそのままになっているが、何点かの作品がともかく残っていることには、違いないと思うし、別府でかいた作品は恐らくまとまった出来のいいものであることは想像できる。…後略…』

夢二は彦乃を現在の千代町の中田医院に入院させた。洋風の木造二階建て。一階は診療室、手術室、二階は病室が七つあった。大正四年の開業。当時の院長は東京帝国大学卒で、県立病院の婦人科部長だった人という。

夢二は日記を書き綴っている。が、不思議に別府に滞在の箇所は見当たらない。長崎の記録はあるのだが。彼の書簡集には、彼が長崎から、別府の中田病院に宛てた手紙が掲載されている。彼の別府での滞在を示すのは、彼の歌集『山へよする』の中に『別府より』という見出

して彦乃を詠んだらしいものが十首あまり見られる。

『さにつらふ紅の手絡し新妻は別府の山に吾をまつとこそ』

『旅の身はかなしきものをわが妻のまして恋ひつつ吾を待つらむに』

『旅の夜に氷をわると吾があれば遠方にして船の笛鳴る』
程なく彦乃の父親の知るところとなり、彦乃は連れ返され、二人は引き離される。彦乃は京都から東京の病院に転院。そのまま再び会う機会を訪れぬまま、彦乃は二五歳で世を去る。夢二の彦乃に対する愛情は、絵だけでなく自伝小説『出帆』の中まで登場している。

私は、二人の別府におけるこの辺りのことを、平成二年から三年にかけて『白い曼殊沙華 く竹久夢二・別府への旅路』というタイトルで小説を月刊誌『アドバンス大分』に一年間、連載したことがあった。その取材の中で、中田病院のことを知り、某日この界隈を歩いた。流川通りから中浜筋に入り、松原公園まで歩き、公園内を横切って、今度は逆に、楠銀天街を流川通りへと引き返している内、銀天街の中ほどで私は、銀天街と中浜筋を

つなぐ縦通りに入った。空き地があった。この辺りだ、と何気なく空き地の隣りをみた。私の目に古びた洋風の



取りこわされた 旧中田病院

二階建が写った。大正時代の建築だった。横板壁に大きい窓、白いペンキの塗りが残っている。「これだ」とぞくぞくとする思いで見入った。空き家だった。友人の、当時図書館長だった佐藤嘉一さんに確認したところ、確かに旧中田医院の建物と分かった。私はそれ以後、なんどか訪れ写真に撮った。これを改造して夢二・彦乃の史料館が出来たら、と思ったりした。

大分合同新聞の別府支社が、この事を耳にしたらしく取材にきた。そして『夢二ゆかりの建物』として大きく取り上げた。記事は、中田医院を訪れていた夢二の印象や、歌人の木下利玄の妻も来院していたことを紹介し、さらに『明治から昭和の初めにかけて、別府には多くの文人が、保養などの目的で訪れた。その軌跡をたどるエピソードを残す建物が次々に消えていっている』と警告めいた記事で結んでいた。平成四年だった。

それからまもなくだった。私は中田医院を見ようと再び行ってみた。そこには建物はなく、広場になっていて、綺麗に整地がなされていた。

白蓮の『赤銅御殿』や夢二をはじめ多くの文士が逗留

しただろう『旧日名子旅館』、夢二・彦乃の『中田医院』などが解体された経緯は知らない。が、現在、それらが現存していれば、別府観光のひとつの起点になり得たと思う。別府全体の姿は戦後は特に、時流に乗り遅れまいと、その場限りの改造が多すぎたという気がしてならない。作家たちが欲したような、静かな湯治場の雰囲気とは逆な方向に目を向けていたような気がする。湯治場から戦前の観光地を目指した意欲も評価したい。が、それは戦争で中断した。そして問題の戦後は歓楽街へと、急速に時の求めに対応して、現にある物を壊し、目先を変えて行ったのではないか、と思ったりしている。ここには土地の持つ自然、立地条件、歴史、文化などという大きいテーマで姿を見詰め、残そうとした形跡は見られなかったことが気に掛かる。

大正から昭和前期の別府の姿は、観光化を目指しやっきになって進むのである。そこにはまだ文化を意識する姿勢があった。次ぎはそのことにふれてみよう。

三、昭和前期の別府と訪れた作家たち

昭和前期の別府は油屋熊八の出現によって姿を大きく変えた。近代的なホテル経営と観光バスによる地獄めぐりは温泉湯治場から観光都市に脱皮させようとする意欲があった。

「……ここは名高き流川、旅館・商店軒並び、夜は不夜城でございます」と独特の七五調の美文を、ガイドの口から流し、観光バスの草分けとし、さらに阪神・別府間の瀬戸内海航路の開発、別府周辺の耶馬溪・飯田・久住高原の奥別府に着目し、別府を総合観光温泉地として、世界にPRした。

熊八の意図は別府を湯治場から総合観光地へ脱皮させようとしたことだろう。そのため、彼は、中央で活躍中の新聞記者、作家、評論家、画家、漫画家などの文化人たちを意図的に招待した。自分で案内役を勤めるなど、新しい発想で温泉観光地別府の存在を認めさせようとした。これにより、別府は飛躍的に発展を遂げ、日本の温泉地としての地位を確立していった。彼の胸には別府を観光地として仕上げる大きいテーマが抱かれていた。その一段階が上記の事業であり、それぞれに企画された戦

略でもあった。さらに文化人たちの持つ独特の目に着目し、それを活用したことである。招待された作家たちは、高浜虚子、若山牧水、与野野寛・昌子らがいた。それについては後述する。さらに、北原白秋は、昭和三年七月、別府から音頭、民謡を依頼され取材のため亀の井ホテルに妻子と滞在し、熊八の案内で久住高原へ出向いている。小島政二郎は昭和五年から六年へかけて来別し、小説『海燕』を朝日新聞に連載した。

大仏次郎は昭和九年、大分県を旅し、『絵の国豊前豊後』を刊行した。地獄めぐり、観海寺、亀川温泉などをスケッチ風に紹介している。

文芸講演会に出席した久米正雄、長谷川伸、吉井勇。『景勝の九州』の中で、絵筆を持って軽妙に紹介した小杉未醒。さらに市制執行記念音頭の選者を勤めた西条八十。別府を舞台に多くの民謡を詠んだ野口雨情。この他岡本かのこ、石田波郷、麻生豊など、歌人、俳人、画家、漫画家が観光別府を目指した市執行部や油屋熊八らの招きに応じて続々と訪れ、その成果を色紙、絵葉書、新聞などに掲載し別府紹介の狼煙をあげた。

しかし、昭和一二年の日中戦争に端を発した戦火は、次第にわが国の観光や観光開発の意図を閉ざした。観光別府が形づくられようとした矢先だったが、時代は観光別府の姿を消し始めた。代わりに陸海軍の病院や連合艦隊の休養地に別府が指定され、別府湾には連合艦隊の全艦船が定期的に停泊するようになった。海軍指定の料亭や旅館、商店など保養地別府、湯治場別府が再び蘇ってきた。

作家たちは戦争の取材に向かい、作家招待の企画も途絶え、また個人で別府を訪れることも少なくなった。別府は戦いに疲れ、傷付いた軍人や出陣前の軍人が、慰安のために立ち寄る場所となり、歓楽的なぎあいを呈することにもなる。昭和二十年八月まで続いた。昭和に訪れた作家たちを順に追ってみよう。

別府の風物を細かく描写した高浜虚子

(一八七四〜一九五九・明治七〜昭和三四)

写生を句作の態度として、伝統的な俳句を発表し、ホトトギス派の中心人物として存在した虚子が、最初に別

府を訪れたのは大正九年、四九歳のときである。年譜によると、「七月七日、別府町の請により、別府、耶馬溪に遊んだ」とある。次ぎの訪問は、昭和二年の夏である。このときは、大阪毎日新聞、東京日日新聞の日本新八景に別府が当選し、彼が両新聞社の囑託として別府を訪れた。そしてその時々に応じて、句作や随筆を書いた。亀川の四の湯温泉、別府の夏祭り、湯治船の様子を細かい描写で紹介している。

「この前（大正九年）来たときこんな印象が頭に残っている。それは、日名子氏に案内されて街の中のどこかの共同温泉を見にいったとき、私たちの目の前には一人の若い女が現れた。それは裸のまま、腰にタオルをまいて今湯から上がったところであろう。くたびれてぐったりしたようすで、その縁に腰かけて、後ろの羽目板にもたれかかっているところであった。そうして、手に水蜜桃を持って、じっとその上に目を落としているところであった。この女は西洋画を見たことのある裸体の女が抜け出して来たのかと思われた。がしかし、そんなハイカラな女ではなく、この別府の温泉にふさわしい野趣の

ある一人の女であった。私はその後の別府の温泉を思うと、この女を思わずにはおれなかった。〔略〕

文中の温泉は亀川四の湯であるらしい。さらに彼は翌日市長の案内で、住吉神社の海上渡御を見物する。別府灣を飾り立てた漁船団が勇壮に渡り、それを見物する市民の様子を克明に描写している。さらに「欄干にもたれてその火を見ていると、一人がこんな話をした。春の四、五月の頃になると、山口県の大島郡とか又愛媛県の八幡浜付近の海岸の村では、一艘の船に米、味噌、醤油を積み込んで、二、三十人が一団になってこの別府に来る。帆をかけて入って来た船は、波止場に繋いで三週間ばかり滞在する〔略〕」と保養地別府温泉の利用を紹介している。

虚子は別府宣伝に招待を受けて訪れているだけに、その描写は細かい。鉄輪の地獄を初め、駅のホームに温泉の洗面所があること、町のどの小学校にも、警察署にも浴場が設備されていること、さらに別府の浴湯のそれぞれの特徴などを紹介しようとしている。

多くの歌で紹介した与謝野寛・晶子

寛（明治六〇昭和十）は、明治三十三年に「新詩社」を結成したころから浪漫的な歌調運動を推進し、青春の憧憬を歌った。晶子（明治十一年〇昭和一七）は彼の門人であり、後に彼と結婚した晶子は明治三四年「みだれ髪」を刊行し、浪漫主義全盛時代を築いた。

二人が別府を訪れたのは、昭和六年九月である。この頃二人は、金沢、福井、北海道、阪神など全国各地を訪問している。日程は、十月一日海路を別府に入り、亀の井ホテルに投宿。二日、竹田から久住高原を訪ね、その景観にふれる。四日、大分市の万寿寺・女学校で講演。五日、湯布院。六日、女子師範学校で講演。八日、別府高女で講演。九日、中津・宇佐神宮。十日、中津高女で講演の後、夜「すみれ丸」で別府を去る。

別府を取り巻く周辺の景観、文化遺産に目を付けて、二人に紹介していることが伺われる。二人は翌年に再び訪れ、油屋熊八の案内で久住高原、阿蘇を巡った。

与謝野寛

「港をば花火に飾る夜となりぬ湯の町に立つ初秋のため」

『霧ふりて霧のなかにも風吹けりほのかな牧の草の鳴るかな』

『乙原のケールカアにいて見れば起き上がること沖の高まる』

与謝野晶子

『とよ国の浜の砂ゆに自らを鶴の玉子とおもへるは誰』

『闇の夜も西海の潮なほ光り高崎山ののぞまるるかな』

『帰らん日さらに思はじよそに見ん別府の秋の棧橋の船』

『この世なる豊の別府の海地獄瑠璃の波より白雲ぞ湧く』

土屋文明とアララギ派の歌人たち

土屋文明は昭和十年、浜脇の旅館でアララギ派会員の歌会があり出席した。その夜、友人らと松原公園を散策した。その折に残した作品の中に『徳田白楊を思う』別府松原公園にて』と題して数種がある。たとえば

『若き君が手術の創のくさるまで命生きつつ歌よみきと

ふ』

『町の中にわづか松ある公園を命よるこびゆきし君はも』

『相寄りて君をかなしみ橋わたるほのぼの清き三日月立

てり』

徳田白楊は大野郡緒方町出身。当時、大分新聞の短歌欄の選者をしていた文明が、年少の歌人白楊を発見し、育てた。昭和四年、文明は彼に会った。この時に文明は血の池地獄を『蜻蛉は虫といへども血の池におびただしくも浮て死にける』と歌っている。

さらに八年に、文明は別府を訪れ彼に会っているが、そのとき、白楊は病が重く危篤状態だった。

土屋文明のほかに、アララギ派の歌人は、中村憲吉が昭和二年、鹿兒島寿蔵が昭和八年に訪ねている。鹿兒島は足を痛めその治療のため、鉄輪に宿を取り、時折、海地獄に出掛けハンカチに即吟を温泉染めにしたり、ゆで卵を食べたことなど書いている。

流川通りを小説の舞台にした織田作之助

(一九一三—一九四七・大正二—昭和二二)

織田作之助と別府の関係は深い。実姉夫妻が別府市流川通り四丁目、割烹「文楽」を営んでいたからである。胸を病んでいた彼は、この家の二階にしばしば寄宿し、

原稿用紙に向かっていたらしい。代表作『雪の夜』もそのときの作品である。零落の街頭易者坂田と、その妻照枝そして照枝がもと大阪道頓堀の女給だったころの情人松本の三人を登場させ、妬みと自尊心のモチーフを軸に、人間愛情の宿命を描く哀調の一篇である。

『大晦日に雪が降った。朝から降り出して、大阪から船の着く頃にはしとしとと牡丹雪だった。夜になっててもやまなかった。』という書き出しである。昭和一六年、彼が二九歳の時の作品である。放浪の中の哀しさが描かれているというこの作品で、彼は流川通りを舞台にした。当時の流川は、ピリケン神像のあったグラウンドキャバレー、料亭、その裏の路地、通りに面した土産物店から、易者、似顔絵描き、粘土彫刻店など。彼は、昭和十年から昭和一八までに、三回別府を訪れている。そして『雪の夜』と前後して、『湯の町』『放浪』『競争』『怖るべき女』など別府を舞台にした作品を次々と発表した。それらはどれも流川通りとその周辺に限られていた。『湯の町』の書きだしも次のように始まっている。

『流川通りを真っ直ぐ海岸の方へ自動車は、真昼のよう

に明るい街の中を走っていた。流川通りは、別府温泉場の道頓堀だ。カフェ、喫茶店、別府絞り、竹細工などの土産品店、旅館、レストランが雑然と軒を並べ……』とある。また、亀の井のガイドさんが、当時、流れるような七五調で『ここは名高い流川、情のあつい湯の町の、メーンストリートの大通り、旅館、商店軒ならび、夜は不夜城でございます』と説明した情景を彼は作品にも残している。

通称『織田作』と言われた彼は放浪のただ一色であらゆる作品を塗りつぶしたと言われている。彼に言わせれば『人生とは流転であり、淀の水車の繰り返すごとく、繰り返される哀しさを人間の姿（相）と見て、その相を繰り返し繰り返し書きつづけた私もまた水車の哀しさだった。流れ流れて仮宿に転がる姿を書くときだけが、私の文章の生きる瞬間がある』と語っている。

こんな彼の作品の舞台に別府の情緒が必要だった、と思う。『放浪』の主人公の順平が、大阪、東京、大阪、別府と続き、徳島、仙台の両刑務所に移され、一年三か月の刑期の後また大阪にもどる。ここには救いのない暗

一人の男の姿が色濃く描き出されている。例えば仙台から大阪に戻り、一泊二十銭の割り部屋に寝て、朝、目が覚めると、刑務所と錯覚してアッと飛び起きるが、まだ眠れると思うとうれしく『別府通いの汽船の上でちらと見交わす顔と顔……』という、当時流行した西条八十の『別府行進曲』を口ずさむ順平の姿がさびしうに映しだされている。私は、主人公が別府の歌を口ずさむほど、かつての別府が「魅せられていた姿」をしていたことを、いま感じている。

さらに、『湯の町』では、湯の町の女と客の交渉や愛情の交流。また『怖るべき女』の中では流川通りを中心義太夫の聞かれる芝居小屋、映画館などある遊郭、港には森永キャラメルの広告塔のネオンサインが点滅し、ビリケンの向かいの暗がりの易者の提灯の灯が揺れ……という調子で、織田作に言わせると湯の町別府の情景を『観光地として、何か浮き足立った軽薄さと、旅客相手の田舎町の物悲しいモダンイズムと、温泉場特有の安っぽい頹廃』などと書き、その中に生きる人情の絡みを彼は作家独特の目にとらえ、紹介している。彼は別府を訪れ

た作家たちの中でも、特に別府を愛し、別府の姿を、巷の人情のさまから独自の観察眼でとらえた一人だった。彼の死は昭和二二年、三五歳であった。

四、終りに魅せられる姿があった別府

明治から昭和の二〇年まで、文化人や作家たちが別府を訪ね、独特の目でその姿を見詰め、自分の感性に触れた跡と示唆を与えてきた跡を振り返り紹介した。そこには、

一、自然景観の中の保養地、湯治場としての別府

二、近代化を目指し、近郊の文化、景観を意識した観光と文化の連携を求めた別府

三、観光地の中にある土地の人情にふれた別府

などが、時代ごとに浮き彫りされた。それらはさらに「魅せられる別府」の姿を作り出していた。その姿を求めて感受性の強い作家たちが、別府を静養の地として、観光の、また作品の取材地に選び別府を訪れていたような気がする。作家によって紹介された記事、作品が旅客を招いていただろう。

一、については、明治、大正にかけての別府を田山花袋を初め多くの作家たちが保養の地に最適として選んだ。そこには『別府八湯』の特色が見られ、それぞれに利用されていた。また市内の何処にも小さな温泉街があった。いまはどうだろう……。

こんなことがあった。四、五年前だったか。田の湯の中央公民館の辺りを散歩していた私の前に、県外の一台の自家用車が止まった。家族らしい四、五人だった。「別府の温泉街は何処でしょうか」と車の窓を開けて、運転の親父さんから尋ねられた。私は戸惑った。別府の温泉街が浮かばないのである。昔は市内の各共同温泉の回りには、旅館や商店が立ち並び、温泉旅館街という一区画があったし、市内の繁華街には浴衣がけの観光客がそろそろと散策していた。「別府の温泉を」と言われ慌てた私は、うーんと唸って「少し遠いですが、直ぐそこ大きい道を西に上がってください。三、四十分もいくと、鉄輪温泉というのがあります。そこが温泉街になっています」と言った。運転手は、礼を言った後で「別府温泉街はないらしい」と呟いて流川通りを指示どうりに

向かった。私は寒々した気になって見送った。

平成八年八月八日に八幡朝見神社で、別府八湯（浜脇、堀田、観海寺、柴石、鉄輪、明礬、亀川、別府）のそれぞれの温泉場が、特徴を生かして、それぞれに活動を起こそう、と言う行事があった。大分合同新聞は「意気高らかに独立宣言」の見出しで、独立のスヌメを記事にした。大変好ましいことだと思った。以前は個性を出し合い、にぎあいを呈していた。が、別府が保養地、湯治場の色が薄れてくると、衰退し、別府温泉の名の元で、活動は埋没してしまった。そして、その別府温泉も市内に温泉地の雰囲気は見られない。湯治場の復活が必要であろう。願わくば、すぐ別府温泉に集まることをせず、それぞれで勝手にPRし、活動して欲しいものだ。

次に、二、の観光地を目指した別府はどうか。戦前の別府は、観光文化都市を狙って、地獄めぐりの開発、郊外の開発紹介、少女歌劇と遊園地の設置、駅、港の整備、公会堂建設、市営温泉の整備、区画整理、商店街の整備、温泉祭りの創設、文化人の招待、博覧会などの企画行事で、温泉、地域、文化を結ぶ別府を作り出そうと

した。大きいテーマを持っていた。

招待された作家たちは、そんな別府を多角的に紹介した。別府は内外から観光客の殺到が起き、別府の名前で来る、という傾向さえ現れた。

が、戦争による中断である。全てが縮小し、戦争の激化で、ついには観光の別府は姿を消した。

戦後、別府は観光都市の復活をはかり、逸早く立ちなおった。「国際観光文化都市」を標ぼうしていた。が、そこには大きいテーマがなかったような気がする。地方文化を育て、文化と共生して行く温泉地としての誇りが見出だせなかった、という気がしてならない。戦時中の海軍保養地、戦後のアメリカ軍駐留のキャンプ地、自衛隊基地、修学旅行などと団体が次々にやってきて、勞せず繁栄したからでもあろう。

別府は温泉を抱えているだけで、客が集まった。その為別府は意図的なテーマを持たないまま、その時々々の時流に乗って、即物的に施設を改善し、持っていた価値ある文化施設をくずし、姿を変えて対応していた。そこには新しい文化と共に生きる対応はなかった。そして単な

る歓楽地になっていた感がある。

戦後の別府の姿に魅せられて来る作家は当然のように消えた。別府は大きいテーマにそって、時流に流されない町の文化をつくりあげる必要があった。そのうち全国の客相がかわり、気が着いた時は遅かった。

が、私の記憶にこんなことがあった。昭和四十年代後半だったろう。別府の中央公民館の前を通った時、私は、何かの催しを感じて中に入った。大ホールには五十人位が薄暗い中で映画を見ていた。終わって俳優・フランキー堺さんが講演し、映画監督の新藤兼人さんもいた。話では、地方で映画祭の催しを定期的にやり、地方文化の盛り上げと映画文化の向上を考えている。別府をその開催地にしたい、という意味のことを話していた。会場の雰囲気は低調であった。当然、市か、どこかに何かの話があったろう。次ぎの年も来たらしい。別府のその頃は団体客でにぎあっていて、文化の取り入れなどなかったような気がする。別府での映画祭の話はその後どうなったのか私は知らない。が、暫くして、湯布院が映画祭の名乗りを上げて、その後、地方の観光と提携し、毎年作家

文化人たちが訪れ、すでに二二回を迎え盛況のようである。別府に来た、中央の映画作家たちと湯布院映画祭とは、話が一致しているのかどうか、これも知らないが、別府としては惜しいことをしたと私は思っている。折角、映画作家が別府に目を付けて行動を起こしかけていたのに……。

ここ数年、別府の寂れ方が取り沙汰されている。平成八年七月二八日の大分合同新聞に「別府の街に再びにぎわいを」の論説が出た。それによると、別府の中心商店街の五〇パーセント近くが、閉店しているという。『当面、緊急対策と併せて、商店街はじめ、にぎわいの場の創出を総合的な街づくり計画の中心においてほしいものだ』と記事の中で呼び掛けている。そこで、例えば、松原公園から楠銀天街、流川にかけて、この区域に、新しい町を新設したらどうだろう、と勝手に思う時がある。ハウステンボスを作った長崎のように。急場凌ぎの改造でなく、湯の街の情緒をいかした、ここに、大正から昭和にかけて賑わった松原周辺のかつての町に、遊戯場、演芸場、商店街、史料館、小さな浴場、小さな旅館。資

料や演芸は小さくても本物と呼んで見せる。そばの公園か、ちよいとした空地の畑に野菜も花も、湯の川も流れる、そんな一見して今では、ちぐはぐなグサイ物を取り合わせて、環境は大正・昭和初期の、夢二や織田作の見ていた別府の街を計画し、作り出し、安心して街の中を客がぶらぶら歩きできる街にしたたら、心のやすらぎを感じさせる街を意図して作ったら、と思ったりする。

別府温泉を見せる一つの区画、街路が必要だろう。今はそれが無い。それには無理に近代化を望まなくてもよいのでは。望んでももう遅いような気がする。また、過去の訪れた作家たちは、別府の海に目を付けていた。旧別府港付近を利用して、湯治船の復活のようなものはどうか。それに、中央公民館もあのままでは、何とも惜しい。別府の誇りとする殿堂、何とか復元が出来ないものか。赤銅御殿と違って公民館はまだ形があるんだから……。二三年前、講演に来た俵萌子さんが公民館を「今度来たとき、壊してなくなったということのないように。市民のみなさん、大事にしてください」と呼び掛けていた。竹瓦温泉とその周辺もなんとか良くなりそうな気がするし……。

朝見川だつて、今のままで単なる溝にすぎない。この際、湯の街、湯治場という基本に帰り、今では一見ダサイと思われる方向に目を向けて見てはどうだろう、と思つたりしている。群馬だったか。「寅さん」会館が出来ていたのには驚き、恐縮した。

最後に三番の、湯の街の人情である。歌人茂吉や利玄、織田作が観光化された街の中で、この土地の情緒と別府人の人情を掴みとつていたことに着目したい。

私が沖繩に旅した時である。道に迷つて街の路地を歩いていたら、家の中からわざわざおばさんが、出てきて「どこかお探しですか」と私に聞いた。私は嬉しかった。沖繩の人情が嬉しかった。それだけのことだが、何時までも忘れられないのだ。もし何も出来ない別府の将来なら、せめて沖繩庶民の、一人の、こんな人情を真似て膨ませていきたいものだ。

また、私はかつて修学旅行の引率で何時も京都を訪れていた。その頃から感心していたことは、京都の街にこみがなかったという印象である。とくに嵐山の渡月橋から川原や川の中を見て、空カンやビニールの袋が捨てら

れてない、街にもタバコの吸い殻が見えなかった。こんな所に何となく私らに対する住民の人情が感じられる。

別府は旅客の入りのデータに気にしすぎる。やみくもに客を集めようとしても駄目なことで、当方に「魅せられる姿」が存在してこそ、自然にその姿を見詰めようと、作家も観光客も訪れるようになる。別府が魅力ある姿になっていることこそ必要と思うがどうだろう。

やはり、魅せられる何かが無ければ、人は振り向かない見詰めてくれない。見詰められるのは、人でも物でも、相手がそれだけのものを供えているからだろう。作家たちは、かつての別府の姿を魅力ある存在としてみつめていた。だからこそ一度の訪問でなく、二度、三度と時を経て訪れていた。かつての別府には、作家たちが、愛してやまなかった姿があった。今の別府にそれがあのか。どうだろう……？

(終り)

(備考・以前、執筆しました「別府市誌」別府を訪れた文人・墨客」の項目と一部重複しているところもあります。また、斎藤茂吉、土屋文明ほか、アララギ派歌人については、佐藤嘉一氏から資料の提供を頂きました。)